三七全傳

南柯夢

八全

特別書庫
1曽4
600
225

600
225

白夢南柯後記巻之八

後帙　第四

東都　曲亭馬琴編次

夜川の野航

着く主の頸を遍せ。ず七ち通ゞ恨。喻るふ物すとゝども。大厦の倒んとするとき。一木のよく拄べきにあらず。只臂を噬。腸を断のゝ。又せん術もなくゝけり。かゝてあべきふにのゝ行ばず七八忙しく。ち通ゞ索を釋捨て。面をげよ。疋を。國乱まてた臣目ゝ。家貧して孝子生ず。七不肖の子を以君家の難よ。令紙情ど。偏よ孤忠を尽さんと欲ゝれども。虎狼途よ接りて。事既よとゝ乃べり。姉ゆ子あり。ものかくもして大和へ赴き。君と父とよ。事の統を告ぶるく。某ゝ速よ。槐姫よ追著きゝて。冥土のおん供つゝまつらん。といひも果ぢ。刃を

肚へ突さそんとする処を。小太郎通へ急よ推隔て。潸然と涙を落し。死んと
ぞ云へ理よ仰されど。死して忠義よるるりのるふべつよこそ先へ死
ぬる死ぬ。死して益なる死よりでもまろ死姫の怨歌陶
五郎ぬり隼人こ。一刀怨ぞそその後よ。肚を切て死ぬ死こそ。真の
武士といふべけよ。云つ死なく狼狽て。世の胡慮よるるふと。諫よべ
半ぞそ。有理と曉りて刃を納め。姉君前の異見道理ふ稱へ。
今堪ぐる死恨を堪忍びる死羞を忍び。灰を呑む刃よ漆さても。
陶と厚よ食を狙撃ぞ。ぞして後よ殉死とも。実よこれ遅きたふべ。
ぞるんども某こよ同ぶべ。寛家も又油断さべるべ。一圓隣国へ
刃を避て。ぞのびくふ寛ふべ。姉君前ふ直さよ大和へ赴て。これべの
こ紙告めて。同胞ぬる共よをんる。謀る死よ仰ぞる。といべお通を

うち点ぞ。吾倚もぞるふこ。曩ふ沼多の毒を生る死。野伏ふよ
推隔られて。拓華微笑尼よ沼逢ぞるるぬ。ぞるべ彼尼刀称ぞちの。
さそ抱胸ぞして坐らふ。今育ふ槐姫の亡骸を。煙とるるぞ。
尻を掻き骨を拔め。ぞよ紙携て泥多へ赴ぞ。彼尼刀称ぞちふ。
縁由を告ぞして。彼処へ葬ぞるるぞ。と云ふ。んを刃もまづ安藝国
まで退ぞそ。尼刀称ぞちふ対面る。又お花が往方をも索たぞ。彼
剛欺を餐んこ。一朝ふ謀るべ。早アそ失るふと。叮嚀よいひ
諭せべ。ぞ七こよる隨ひて。志を激る。撲る刃の疼痛を忍びく。
お通ぞる共納戸ぞる。姫の亡骸を扛生ぞふ。彼ぞふ。しる単衣の
いぞく鮮血よ塗よるべ。その色ぞるんえぞる。頸顱るけよ。
在り世の。ぬるとも定め難ぞるぞ。ぞよ漢ぞる死ぞいふべるもふべ。

涙のこゝにとゞまり落て。伽藍山にもゆるつの日の暮るを待て亡骸を密やかに野外に出して。遂に一片の煙となす。送骨を壺に納めて。こゝをば通が項に懸ゆゞて同伴うち連さちて。安藝の浪華へとそゆく程よその夜通霄走りしかば。福川のあるさまの八千川の不とろまぢ来よ々。十七日の月もやゝ傾てんやゝ曉るふ近ろ。おつまて夜をあかしてこそ。彼川をば渡さあとて同伴ろ共よ。夏草を打布て。小憩時憩んとしるる打。途ろ跡を跟てや来ん。引剥欲とおぼしくて。月額の跡長く延せ。牙ばかる丸暴雄ホ。三人。樹蔭ろ走ろ出おぼ年ろろ丸男女の。夜をこめて跡を奪ふ。仇るる情跡を闇。鞆の便私をこそろ當よ。大坂へとそゆくふや。あん。疲労ろとも。馬ろりとも貸べきよ。酒價を

こせと。敢動つ。前よ進こ〜大倭子。衛と寄てゞ七ゞ。胸前をむずゝと捉ろ。衣の袷を懐へさ〜入まんとする刃を。搏ひ退ろ身を起〜。引被て撞と投まべ。後ろる両人の悪棍ども。大きよ怒て声をもやけど。刃を援て砍んとする刃。ゞ七ゞ〜ろと牙を反ろ。衣を拒左よ當ろ。いとも烈〜戦ふ行よ。投ろれる大倭子。ゆゝふ牙を起〜て。二人が中よ押取巻ゞ。ゞ劣と憑よ砍ろまべ。通ハ倩よんるも阻く。身よ失わふせゞと。懐叡を引拔つ。悪棍ホが後方ろ。一声嚏て魂ゞ。女ゞるれども侮ろ〜。悪棍ホハ既よ背ふ敵を受て。大刀とゞ忽地乱まよけまべ。ゞ七劣ひ十倍〜て。踏込て怒刀ふ中る賊が胴を。三すあまり丁と切ろ。くとゞふ左ゞる。大倭ゞ右の腕を砍て切とせべ。仰さ。ふ倒る〜沢。い通ハゆゞて取て押へ。

ちくれ
八十川め
野航よ
夫婦同胞
危難を
脱る
おたつみ
ろう義
羊七
あ白太

ちくく丸
かつう
ちくく丸

懐剱を取る隙もあらせず胸前ぐさと刺徹せバ。二人の悪棍声もなく斃て刃を
引抜るに紙半七ハ脱さずと喘ぎぞ追て来く。その間にお通ハ刃の血を
拭てやがて鞘へ納めて立あがり。半七よ半七。と呼ばれたれどもひそかに半七半七と
呼かけて跡を慕ひ。これも又おなじ所ならぬ水の隈河原に近き二枝
路ほとりつきも追着ざり。さる程に半七ハ二人の悪棍を逐てゆくと
又六町ばかりが中に撃留しかバ。更に旧の処へ走り帰るに姉お通ハ
何れへ行けん。声限り呼べども応せざりし。悪棍が同類のこの処に
隠居て姉を掠てや去りんと思ふに心とゞめさらにいふに可なし。
あまりに索ひて。川の上に赴くに。向ハ岸に繋る船の二艘ありし
ともひつるに今見れバ只一艘あり。原来姉ハ川を渡りけん
とて遠く水際に立て。船へ閃りと飛乗れバ。舩杭によりて縛られたる

人あり。夜川の水煙にて顔ハ定かに見えねど女子と猿轡とふ
ものを被られて手さへ背へ繋れたり。これぞ姉にて在けりとさらバ
更に問諦らんなれど急て縛の索を解捨。猿轡を外しつゝ。はじめて
その顔を見れバ。あな浅まし。姉にハあらで思ひかけざる妻のお花
にてありしかバ。いかにぞやと驚きたづね。これを勧て且その由を
問に。お花ハよゝとうち泣て夫の袂を顔におし当。恐ろしさに得せざり
なり。且して涙を拭ひ。主の為夫の為に一たび捨る身にしあれバ
絶て別れてもくやしからぬ身の環りあれど漸く憑ませぞ。とうち歎きたるよ
うひきや。夜川の舩とも共に繋ぎたる嬬の縁竭ぞとて
逢んとて。さても一昨の黄昏に小侭の縣正の使者とて来る悪棍
等これへを彼処へ率てゆきで。お中小屋へ昇入れ。その為様こそまことに

売街へ賣るやあんざらん。と拵帝れば幼もちねざ。彼宝刀を
牙と代て。陶が妻とするぞふも。生て居んとおりんざりしよ況や拵女
とるんふ。和のうくるる和をそ。只速よ自害して牙を繋くせんりの
をとなるくまちひ定めてぶつぶうくかくもるうもけば。風流士の宝刀の
工も。虚言るりとん拵て去るぷ。これそもるれくもなれ。良人のうく
いとぶりとるぷかるねるでも拵を出て。こまちらのとる衆良人よ告。その
陰よ死るべ死てん。去るこくど。忽地よりひくくつさのふの嘸音に拘み
紛まて潜び出間道より走る行よ。不学よ路よ惑ひつ。氷上のうくへ
行るもかくぞ。其処とも去るね山路よ入りて。物問んふも人ふ逢ざそ
山路ふて夜をあじ。又山路ふて日を暮し。辛して里へ出やこの処へ
来さりしよいとおどろくしき倭子ども。二三人走り出て。矢庭よつらんよ

猿嬢を衛つ。この和の中ふ繋ぎ置。跡よりも又一人。ふ死るのいぞ
来ぞそれふ男の倍もあり。侮アそ走る次ぶ。と二人ぶくべこ行
行自よ。ふ拵点ぶて待てをり。かくてもん牙ぶ。彼悪棍ホと戦ひるふを。
ふるさようふんるといくども。間遠けまべ。何人ふ衆去ふべ。おいられ行べ
ゆうみて。敢ひ衆求んよりもるくう死をんるめの水と陸。藻よ住虫の
つまうらと青よのをる死て待りしとらひうけて又よと泣べず。七頭ふ
嘆息して。やをく背をうん拵り。別邑ふ一昨るれども。もん牙ぶ往方ふ
ありとるく。たづぬ逢去くちふりめのうら。又一層の禍ありて。安蘆の
泥見へと夜をとめて。赴く途ふて。とんとふべも。もん牙ぶ先途を拵ふと。
長の中の欲びるり。まづ何ふくうう語べき。彼件のるどもふ彼悪棍
ぶるぶ詐詭の計ふてありしぶ。風流士の宝刀をうも寝さべ。剥その

夜天神川の辺りまで。彼老翁に誘ひ出され。縡既に難儀に及びし折から。思ひもかけざる姉に救はれ。槐姫に環會なりて。やがて宿所へ誘ひ来る程に。なにや旅人ありて。おくれ姫を殺さんとす。かくれば一ト日なりとも存命べき身にあらず。脏を切て姫君の冥士の御導せんものをといひしが。是も又姉に諫られて。更に仇人を殺さん為に。且く彼地を退く。姉ありし共に。沼多の拈華庵へとて赴くなり。されども遠く人が箇様なこと。お通が同樹を天神川へ砍流せしかば。敗鐵全ぬがれ。陶五郎が厚会隼人が姫のおん頸を刎たる上。拈華菴の両比丘尼は。外母を死と。お花が妹の夏山なりし上。此彼おちもなく物語しかば。お花はたゞこしみ泣て。或は驚き。或は哀み。或は恨み。或は怒り。涙般を浮ふ如く。在明の月もこれが為に更に光をうしなふ似なり。且して牙七は。

忽地陸のかなしみ入り。今既にお花に環会といへども。衛に草鞋等を追ひとしりに。姉の往方を失なへり。お花は二人にて。彼為倅をたんなるか。女子の川を渡しをえざりしが。向へばお花はうち点頭現宜されなれ如く。衛におん身が悪棍等を追蒐て。西のかたへ走去ありし時。跡に残ある婦女子頓に声をかけ立て。長追みしあひそとよばはれどかけて立在るが。遂に左手に繋たる。野航にうち乗りて。さがら棹を操りて。向の岸へのぼりしに。原来姉御前によりとりしが。かれを牙七ぐ果ども。見るとたゞ安し。これも向へ舟を着て。とく姉御前に逆著んとて。遽しく纜を解捨て。船を河中へ漕出しかば。潜わたし一人の癖者。稚荻の中より頭を出し。提たる種島の鳥銃をすかし。河中なる舟を窺ひて。火蓋を切て撞と發ちぬ。牙七も棹を

抱て。弦ふ伏ふけまべ。丸ハ頂の上ゑうてぬ〳〵ハ牙ふ恙ゐ。癖者ハ古の形勢ふ乙慌て。又遠〳〵丸を籠。再び狙撃んとすると紀。私ゑ忽地向〳〵蕎て。間遥ふ遠離まべ。癖者大きふ焦燥て。弓を捨て投捨。続て向〳〵没さんとて。私を索て河流へ沒ぬ。ゆ〳〵。傍の芦荻をさゝ〳〵と推ふ分て。顕まゑ出るハこまゆ又。癖者とも〳〵て。母杖ふ面を果〳〵。肩ふ受ふる金瘡を布りて巻て項ふ結。母痍ふ屋せ及面塊。河原を走る癖者をつ〳〵と透見て。全仗等と呼び岡る。声り後共ふ昭鳥森とゑる〳〵朝風ふ。夏いと寒紀八千川の。ゑゝふ走むかゝれ時ゑ。旅客のいで来る狭。と左右をゑゝふ待。立ふ紙ゑ母振ゑふ。此彼ゑべ〳〵密語ゐゝべ。

合歓の花桶

天文二十一年。夏六月廿ろの日。安藝國高宮郡。沼妻の郷のゑゝふ。彼此人隊をゆ構を結び。括華比丘尼ゑ草菴ふ。嚴法の兵材天を勸請て。三日三夜の法延を興王あゝゝ。その布をたづねれば。今茲ハ五月のえんぢめゝ。絶て一滴も雨ふ降草木ハ枯槁。金石ハ流爍。行人途を去りあゝぢ。民の歎き大ゝゐゐふ行ば。両乙の祈禱をせんとて。彼此の里人ホ。女僧ゑ菴ふ天女を祀ふ。或ハ笛を吹。鼓を鳴ら。ぱふゐん三日の結界。とて。糸竹の老弱男女。咸菴室ふ集会ゑ。隊の長搏の所ホハ。ゆ織木綿の行浴衣へ。麻上下をゑんゐるもあり。猿臭禪のゐゐる裸體へ。葛の袴ゆ穿ゐるもあり。曜齋青道ホハ。白袴の単衣ふ腰衣まゐるもあり。てゆと置ゐ〳〵毒ゑ。堂涛言る洲の横袋ハ。六畳の旁へ集合のゆ。浦

三原の二隊は客殿へ国君の四条の新構えをば柿の水引み隔て居るせ。彼後ろ向かんるべ元へは。さぐ酒を飲さぬあや。布施々大人小児をいはど。百文つ。膳牌と即こ。ぐん。平四は茄子ふ油揚の豆腐。雑混ぜ汁。猪口は葉胡麻麩の切ざて飯は食放題。僅幾銭百文の布施物でやくの如くの齋て つれ。如是の法会よ逢ひ。獲がられ甘両を獲さらんあはかでろう廉さ ものはほ。年道場はよ陝まれば。奥は殊さらいく房もあら祢ど。各位行儀第一よ。神妙よ問綾しの百味の供物神酒るんどる。流経果て割賦ぶ。履物へ牌著て。置所を忘ぶるふ。預物を いさぬぞ。よ拒。懐中物の用ぶ。奥へく。と声ふ立く。嘘けば 目口へ流ぶ入る。汗もあく我ひあどど。施主も道者もつれ立く。

客殿陝しと籠入りりう。その日も午の貝吹て。案内やうや度絶 ろう。紛ぶ入る道俗二人。奥のかたろう潜び生。月と月を待て長民 法。端ちく寄りて縁ふ立在ぶ。初翁。奥の馬侍よどろをつけて ぶ。ぶく。この途ぶ。ぶさらんとぶ。ひす七ぶ。新ぶふる人不審と いぶ同樹ふを抗ぶ。やよ全ぬ青宮。と拝禁て奥をんろう。額を ありて声を不そぬぶ。もさんぶども。足弱を伴ふれば。ず七々 後ぶやぶけん。道ぶらもいひつる如くいぬる十六日小夜ぶぶれ 彼ず七を天神川の河ぶ。泡ぶ。さぬぶ罵りて。飽ぶで這奴ふ 腹をたく。言葉質をぶて撲つ跟つ。竊よ汝ぶ来る紙ぶ。晴蹠 ちぶてぶひもろけぬ。女のぶよ鵬を砕割ぶて。河ぶふ滾帯りば。 山川の早瀬よ推流されて浮ぬ沈ぬ奉りて。沢川へ流ぶ生。彼処の

里人ホよ助あげられるゞその人後死やまけん。物ひとつもゞえ
行ど。流石ホよ命運掲ざれゞ忽地ホ甦生て。気力ハたゞめホ異るゞ。
せゞて医師ホ瘡口を縫ゝ。僅ホ一チ月保養ゝて。十八日の亭午。氷上へ
立ゆゝて。ま七ゞる紙問べ。まるりのあり。這奴ハその夜さう。槻姫を宿
所へ伴ひ。ふ事忽地ホ発覚て。姫をゞ四五六の隼人ホ警ま世を
形るゝ中ホひけん。妨のお通りろ共ホ華洛のかゝへ赴ゝとて。この曉ま
起ゞゞゞ。ゞゞ全ゞと問ひゝホ。彼ハ陶殿ホ疑ま。隼人ホ関
られゝとハ。哭ま毎ホ本意遂ゞ。腹のゝろゝのをるれゞ。やゞて
ま七ゞ跡を追ゝ。捷径を通胥ゝて。這奴ホよゝ先へ接出ハ千川
の河ゝるる。競ゞ鮎太。石伏義ゝ呼る。三人の野ゞせゝを相潭て。
ま七お通を待ゞゞホ。競ゞおハいひゝひる。三人奇ゝ。ま七ホ警ま

ゝれゞゞれも底気味ゝろくゝゝ。稚荻の中ホ潜ひて。姫終面
をも引出さゞ。這奴ホ小水ホ流ゝ。阿容ゝと眺め居ゝ。没も
又ま七を追蒐て。私へ弓弦を打ゝけゝれど間遠けれが當らゞ。
かゝまで間のゝろ孔打ホ。毛を吹ゞゞ疵を求ん。這奴ホ往方い
定ゝふまゝ。一旦ゝれを去ゝして。追撃ホまくゝとおゞどゝひゝゞ。
汝をゞ呼び南ゝゝ孔。まゝるにいとゝゝ引ゞゝ孔。倦る女をゞお通と
やゝんゝりゝとゝひホ渠ハゝゝ四五六ホ密語て。撞木町へ引ゝてゆけゝて。
泥ゝ出ゝるお花ゝり。彼徇妻ハゝゝホ脱出ゝりけん。没ハゝれゝ
の趾とまゝゞゞ中とひそゝ孔問べ。全ゞ哭て眉根をゝせゝその夜さう
お花ゝるゝをゞ。四五六ホ任ゝゝれゞ。五吾俳ハ孔ゝて。ゝ且ゝを去ゝゞ。天神川の
不とゝりゝてゝん。ゝ人ハ撃ゝまひ孔ゝゝゝゞ。次の日氷上ゝ宿所へ

いゆゑて。ま七お通を撃取らんと走る折陶五郎の来かゝりしかバ。撃べき仇人を得も撃ずとられハ却陶殿に諸られて。四五六の隼人に閑ふ主冨岡の稚山へ伴る。途より竊に取て返し。ま七が草深のかくれ家へ赴くよし私語しかバ。夜を日に継て這奴等を追蒐八千川の辺にて。その背影ハ見えれども。ある一條を隔られバ。赤彼処にても撃漏し。憾ふ思ひて来けらんと思ひしに跡跟らるく。とやかやとありて。途をうえて迯る歎中途にて撃べかりし奴を手に深く慮りて。追失ひしハ遺恨なれど後悔されバ。ちがひて走る思ひハ理りなれども途をうえてもぬの処へ来るはしハ西条まて。ま七が里人に沼多の拈華庵そ所処ぞと問る紙竊咲るをもあれバ十ヨに九ツハたがふべからで彼お通奴ハゆび死へあたけんでもれハ這奴が面を懲らすと奥なる群集の中にあや在る。全く汝へ遣らざる欤と関が額をさし合し。お通ハそれや来りけん。欝の奥にて見えしれども。這奴等ありてハま七を撃んとと為し妨ならんと思ひて群集に紛れ入り。そのうちハ奥へ往きし只ちろめとろ紀る。ま七が往方ふとそといひつゝ外面眺望れバ同樹も共よ伸あがりて忽地に指し示し。向ひへ来るハま七ぞ。後方なるハお花らし。衣の色こそ定らふ見えねど。菅笠に認ありといへバ全く雀躍して。現ぐ彼ハま七なり。此度ハいかで迯すべき。と拳を捺しバ同樹へ頷ぐ。逼てハ事を失ものぞ。汝ハまづ彼処なる芭蕉の背に身を隠して且く便宜を窺べし。我ハ又簀子の下に屈り居て汝がま七を撃とき這出て。矢庭にお花を扛攫て走りなん。援るもの有るなるバ。汝ハ立とて夫々お通を引攫ひ。それに続て走り去れ。

よ中怨を復〜たりとも。玉を取〜持ようらぶと。諫〜あいさる
祖と孫勇むいちぶ義と慈み。立コろれさる庭の隈全く刀を
抜て。母衣の竹を丁ど切取り。秋筈うくと准倚の竹鎗。ぐうくとうち
揮つ。下〜ちぶ死て撲こちくび吾倩ハ芭蕉の蔭ょ。身を避て這奴を
結るんぞく〜滑びるくり。といそぶせどもる母騒ぶど。早りてみ失せそ。
八千川みて。ゐる院を。放うけられさるエもいれば。ま七も又油断ぶるせ〜。
いん祖のるのいち〜果て。ゐ彼透を狙撃。遍ぶく。どんくりんくり。ぶそ
這入る床の下。軸の糞をもふ端でぁるや。と土へこそう著。耳ょかぶ
ちる蜘蛛網を。掻排ひつ孫ょたり。かり。祖ょま七ま婦ぶ。身を
さもぐふあく物のたぶ祢當ぶるぬ〜さの巷。遥ょ柴乃戸をうち
ぶそこてるりけり。とぶふぶぞ。日新ょ落るお死をんくり。この春あん

牙のろ共ょ。つ扁うたづ祢ぶょ。ども。其処とも。ちれどそぶ俗ょ。
訪つぞるふ〜草菴今さらぶくび索ぶる。巷ふあうざるふどそ
往ふちょ。加之面新の。つだろう変ょびとそそれとそ
ぶひうけざりれ。ぴれちぶら愚るり。こまもま婦ぶ腹ょ弱ね尼ふ
あんべき祥るりんん。ぶん牙いく疲労ぶふ。今ハ千ゑ安〜。
といひ慰ょび嘆息〜。絶て久〜れ叙母ぶ前と。妹ふあんハ喜〜
けょど。袖ハちぶ乾ね濡衣の。ぶれ名を雪るょそぶもる。彼此ょ
牙をおれう祢て。訪ふ〜る狩。とぶふまん。とぶくび面るく。待るかぶ。と
いふまも嘆息〜。つまハぶん牙ふ祢信て。槻姫を寛家ょ餐れ。姉の
往方を失くび。彼も此も面ぶせん。どだろうみ〜て止へぶたあらぶ。
外母の女僧ふ對面〜て。妹のもく〜ょ向定め。志を演て後ょ。

草の戸を死所と覚ゆ。孫て志るふとぃひつも又嗟嘆とんば。
おゑハ頓ふ酸鼻。ゑうゑと宣ふ。馨馨ゑくも時の運ぉん身がた
ゑハ皇天の毎日ふ思しのふ。るどハいくゑひ定めても。定ゑゑハ
長別離苦。一度別まそ又逢て。別まの後ハいつゑらんといひひて
口隠まゞず七声を激しそ。ずゑ盃の歎きハ女子の愚癡ゑ中柴門ふ
ゑさゑしふ。泣ゞ伏ゑゑ入りゆくと諫るまも。新護て。弱なくゑ
ゑるも入ゑゞ。且くゑ在ゑ婦ゞ後方ふ。忽地鞍の人音ゑゑ。ゑ
るくゑんくまゞ。ゑゑもそゑあれ厚食集人。腹巻ふ野袴穿て。行
装いゑめゑ。赤銅造の両刀を長ゑふ吏ひけら。ゑ。紀元桶ゑ提
つ。従者を駆ゑて。三掉の唐櫃を扛擡し。柴門ちゑくゑるゑどよ。
ゑ七ゑまを信とゑて。這奴ハ正しく牟人ゑり。姫君の雛歌。ぶ
ゑまよゑんのゑるべゑゑゞ。神明の冥助よゑらゞハ。
必姫の亡ゑの。仇人を道ゑ紀ゑゑふゑそ。ゑる喜ゑと笠掻ゑう。
且く天地を礼拝ゑて刀の鞘を口潤せゞ。ゑ元ハ袂ふ携ふ著ゑゑ
ゑくゑハ猛くゑも。彼奇せ仇人ハ夏ゑ勢。午角の勝負ハ云ゑゑ。
ゑゞ濁びて仮宜を窺ひゑふ隨ふ駕てゑそ。真の勝ゑハふ
ゑけまと諫まゞゑゑち兵所ぉん牙ゞ異見その利ゑり。ゑ戸ゑ
蔭ふ立隠ひ。従者ホゞ退くゑと。遣過ゑて牟人を駕ぉんゑゑ
ゑそま婦ゑ立ゑれ。推ゞ忽然ゑらくと。要除ふゑゞゑ清
ゑ戸の蔭ふ隠まて寛ひゑゑ。ゑる程ふ厚食牟人ハ。庭門
ゑゑと唐櫃を。指華菴の縁前ふ扛入まゑ。ゑ呼門ふハ

和率二人。ちゝ引て声をふり立菴主の比丘尼ふおきうさん。
ゝの法会の施主として。陶殿の市内なる。厚会年人友善ぬし。
みづから来臨しのつて。出迎ゆくと呼まゝども。奥ゝ敬動く人の声。
門いたゞく憚の者ふ紛まて走ゞ疲もせゞ。まゝ〳〵呼まてく。
括華尼ハ微笑を扨て忙〳〵。縁頼まゞ生迎へ。こハいろひもりけぬ。
里人等ゞ私の宿所ふて。雑財天を勧請。只懇初ふ集会する
のゝ元結ゞ。沢の廠の市内の刀称原清来ふこそ幸ふれ。ゞ
ゝのゝと。請をれば。厚会年人ハ怨然と。上坐にうちあゞり。
やよ女僧ゝち。縦里人ホゞ私の祈禱ふもせよ。衆人幼級一致ふて。
庭く法会ハ殊更ふ天女も感意志のふゞ。ゞれ一昨日富田ふく。
ちの級結咲て。嘆賞のあまり。法会の料を助ん為ふ直さい
みづから裝向せり。彼をんよ。三棹の唐櫃ふゝ。白米五百袋
青縉百貫文ゝ級布施を又ふ級布施を又ふ級投ふて。
今ゝ盛の合歓の花。槐樹と紅ゝ桜ゝ。
陶殿の武運長久ゝ。ゞ幸ふ幸あゝ。せて。富貴延満如意
吉祥と。叮嚀ふ祈念あれと。ゝ
うち微笑宜ふ赴ゝ。ゝかふ説示せば。括華尼咲て
各つけゝ。ゝを面会人ハ祈りて。行ゞ。ゝの花と面倣ゝ。紫乃
状ハ槐ふ似ゝれど。花ハ殊更愛らゝや。天女ふハ肩掃の。ゝも
似ゝ。ゝ。行ゞ。ゝと化ゝ。ゝく。美ゝ二人の女僧小頭領けゝ。
むゝ。厚会年人ゝち点ゝ一瓶の花ゝ。ゝ。ゝの菴
ゝ。ゝ。ゝて汗を納まん。従者ホハ外面ハ羅ゝ出樹蔭ゝ。

く涼めど。いそぎしころまでハ従者ハ折戸を出て樹下蔭。ありけりひ不意に預けに両女傳ハ客殿へ設の席を修理んとて。やがて奥へぞ入りたり。折こそよけれと半七ハ折戸の蔭より顕れ出て。刀の反をうちかへして縁頬に立の侍り五逆の罪人厚子余年人半七を認めりや。今こそ復を姫の讎刃を受よと罵りて刀を抜て丁と砍る。扇を以受とどめ。汝よ待ちさしつかへるありと云もあへず刀を引て透間もなく撃て鋭る壮士の太刀風いと烈しく。あしらひ得て厚子余ハ花桶取て受とめ。内より出る女の頭半七倚と見て斬んとて。へつかと疑ひ惑ひて居るを。尻居に撲地と坐し浩処に全みハ竹箒を引提て芭蕉の蔭より突て出。一旦撃んとおひ定めし。赤根が長男刀治半七。とても脱さぬ仇人の

半変。全みが手料理の繊刺ふして見えんなと競ひ懸らんとせんバ折戸の蔭より。あれハ吐嗟と走り出て看かへて全みを遮り留んバ物ともせず。只人昔しき女子の助太刀汝も且の相伴させんと竹箒を一揮。鬆投ておはなが衛背へかけてざっと刺か捨ん忽地蹉跌とわさか花が姿ハ煙のごとく滅て跡なくなりしかバ。さしもの猛き全みも。忙然として前後を失ひ。これハ如何あとでつれゆかりし半七この形勢に寄ちかく斉奕のおもひをなす。ところへかく厚子余年人が携る花桶より還生る女の首級ハ。おはなが面影に寄らぬ。これのころにはせ参り捨くも。半七ハ撃んと出る全みを遮り留めて。竹箒に纏れる花が姿ハ消失て。全みも又叛出せり。彼をおもひ此をおもふに。八千川の野航ふて。そそぐらうし環会

南柯後記巻八
全次
半七
拍義庵ヨ
ありの
仇を
報ん
とも
かえる

南柯後記巻八
半七
半七進
今日
沈香月結
拍義庵

この外ゝで伴ひまゐる。吾妹子ハ世ふるゝ魂の幻ふ顕さゝれ欲
それ欲おゝぬ。怪ゝゝと。ゐつゞて小膝ゝそゐ伴ゝ刃を鞘ふ納ても。
ゆゞおゝまゝゝ犬狗の雲疑念ハ更ふんゑゞろゝ。當下牟人ハ
近く居寄ゐて。扇を劣ふゐうゐる所。ゆよ赤根生縁放とゐふせれば
さそゐ牟人を憎ゝとも。反逆人とも云ひけ。今とそ諦を撥密の
謀畧ゝ弱を定て吟メゐゝ抑某父二郎太まゐろ共ふ槐姫ふ
冊さまゐ。周防山口へ赴きそ。両三年を送る狩ふ大内殿の驕者
ゝゝゝふいゆまゝゝ。月を殺るゝと幸のゝゐふ。老臣ゐる陶晴賢ハ。
黨を樹比周ゝ。主を凌ぎ權を賣る。謀反の萠顕ゝとゐろ。ゐゞ父
友春ゐゝゝかゝゞゝて晴賢が叛んと欲ゐる有よ。ひとゐ幻欲ゐ
ゐゞ持病の積聚ゐと更て減参ゐ某輝ゐそゐひゐ。今

ゐひてゆ。某を枕方ふ招ゐよ。陶ゞ逆謀気を見ゐ。
不虞のゐあゞべ。槐姫のゝ極めて危ゝ。ゐゐんども。陶が阿黨の
佞人内外ふ充満ゐれべ。汝孤独の矛を以明白ふこれを禦ゞべ。
却陶ふ教ゐゐのんゐゐれべ姫君のゐん為ゐあゞべ。悲ゝいゐ形ゐれ
死ゐゞべ。大内家ふ乱ゐん欲。汝ハ假ふ淫酒ふ耽りて。放蕩無頼と
人ふおりハせ。この地をゐゆ逐電し。永禁の間ふ矛を磨く。時く
平城と周防の為体を吟定め。晴賢謀及せゐと吟メゐゞ一番ふ
支著て。姫君の先途を救ひゐゐ。車いゐ難儀ふ及ゐゞ。密て
陶五郎・隆春ふ底意を告げ。人の力を備て。槐姫を救ひゐゞ。
弟てハ赤根蛭松の両老臣と示ゝあゐて。徒并家の援兵を求
清。且大内家の舊好を云ゐゞる。西国の武士を相潭て。晴賢を討

減ぜべし。陶五郎隆春へ主命服ふ所なし。晴賢を父とせんにも。
その公ざるを恥ぢ。ふ。ぞ〳〵実父まことを。弱冠のとき似よう。
竊ふ法と力を戮して。姫を救ひ奉ん。彼壮佼のこれらの
る紙胸ふ秘て。ぞ遺言を忘て。利ふ惑ひ勢ア
つ。一点だにも不忠の志を接べ。未素永劫親ふあらど。
と密ふ説諭。その夜空しくなりしうべ。某失怙の哀ふ堪ざ
とくども。君父の為ふ誠を忘ぬ。徒もあ〳〵淫酒の為ふ武具
衣服を活却。飽まで人ふ疎まれて。遂ふ山口を逐電流浪して浪速へ
赴き。牙ひとり棒ふ沢ふる鐵の四五六と改名して。平城の青耗西
国の形勢をあらん為ふ一処ふ宿を占ど。一昨年の冬浪速を去て。
去年の春まで大和ふあり。ちうるふ布施ふ徒井殿ふ辺の父ふ命

のひて。茶谷山ふある木精塚を発し。風流士の宝刀をとり出させん
とのふす。つ是偽ゆてつらく〳〵ふ。むし陰陽師村上親実が
いひつるよう。又二郎太まが物語ふて咬さるもあるべの紙いくるれば
徒井殿。ぞうら武勇ふ誇りふぞ。彼宝刀を生しもつ。禍主従の
えふ中ふ乃んこにゆふせんとて。頻ふ憂ひ悩ふ。敗鐵の全々。
擽本の松原ふそ。辺の蓼くを聚んとて。却養母の自教せしを
哀る。その外くもれ。遂ふ全々をそのして。木精塚を掘崩し。
風流士の宝刀を他所ふ埋めて。徒井殿主従の。牙ふかるべき禍を
禊除ん。と謀りしふ。彼大刀忽地空中ふ閃き升り。西を投て飛
去しうべ。お為く〳〵安うべ。全めさえふ誘ひ立て。やがて周防国へ赴き。
まのびくよ。風流士の宝刀の往方を索まべ。彼宝刀の故ふ事起りて。

大内殿主従の間快うらぶ。晴賢俄頃ふ謀反して義隆自殺し
あひぬ。主も又彼宝刀の崇よあらぶ水谷る。水精の徐怨を
こうふ祠くそその禍の移りや来けん。まうぶ褄姫のうへいとも危いつも
あそ姫君のゐん往方を索まあぶし亡父が孤忠を空せじと夙よりひ
夜ふ泣くど絶て姫君のゐん在所をまうぶ。かりし狐ふいねる十六日。刀冶
同樹が欲心ふそ。入主みふ説示し。天神川の上あそ辺を殺せんとて。
剝ぬ辺の妻女ぶ。主と全めふ詐詭取ぶし撞木町へゐてゆけと
いひうぶ。これ又陽みこまふ与して。全めふざも底意をまうせだ。
陰よお花を他所へ伴ひ。直さよ天神川の上へまうゆくく。事乃
為体を張へぶ辺の妨お通刀祢。同樹を川へ砂流して辺を殺ひ。
同胞こよ再会して。褄姫を誘いまあぶし。氷上へ逃んとまうふ。

竊咲まうふ。主みも又こよ来まうて。矢竈ふ辺を殺ぶんと
せうぶ。主又主みを助るもりちして。却こまを遮留め。辺へ
さらるのり褄姫を故ゐ。姫ーまあぶ。これどこのうまゐも
風字して。次の日ゐるのの多うかまぶ姫のゐん命。その危ふ
風前の燈ふ似まうり。この時ふ隆春乃助をゐまぶ。
姫君を救ひまあぶまべさと。ひうして山口へ走り
ゆくく。竊ふ陶五郎隆春ふ対面して。仏中の機密を告
るふ。隆春咲て眉を顰めつまもまやこのうの狂咲ーうぶ。
仏苦ーくりのうまうれども。褄姫ハ刀冶ぶ宿所よ潜びとん
まるよう。人有て。向よ養父晴賢ふ告うまぶ。凡常の外集そ。
救ひまうんと難うぶ。まうれども年来深窓の裏ふ冊うま

るひとる。穂姫ふかりなせば男しるのれつが養父とものども。
面新定るあいさまと祇らば。年栄骨相。姫君ふ仏よる
女子をりて。ちん牙代ふかり。ちりまり。ロ辺苦肉乃計を行つ
萬ふ一ッ姫君祇。枝ひ進ふとるるを弱るん。彼姫君ふ代ら
とる。女子ふありや。と問まーうがつまる忽地ふありふやう。鶯ふ同
樹と歌きて。他所へ潛ー居らしとる。寸七ゞ女房ふ花ま。年
栄といひ面新といひ。かまを穂姫るりといひこちらもる。雑
ろい疑べき。特ふ彼女子ふ。嫁ま曾太郎の女児ふーてつが考ふ
外姪るりまます七ふえ来忠孝の壮佼るり。事急るまふ寸七
ふ苦るふ乃ゞど。如此ふ謀んとそ。遂ふ隆春ふ諜ーあんー。
まを留めーつふが失ちのひとれかるき濡衣の乾ようも
るりしふ。物ふ托ーく玉枕市前のあんいと惜ふるまべ。
助るる紀令下助けらまー。恩ふ報ふまこの時るり。今一篇つが
所天の面影ふまるる向ーけまど。懇ふるるるんば。忽強も
いとぐ情ふ新べ。おり（ゞさふの世ふ假の宿。永き冥土ー
嫡まの。契をたゞくのふると。言傳てゞといひろみて後いひ
殘と隠口のるるの紀別まとるひゆまが。れも涙ふるる紀

るるくふうちも騒うど。風流士の室刀の庵ふ。寛家の側室
とるるぶふも。主とまの為ふい厭るど。ろる新を況ん姫君乃。
先途ふ代りまりて。良人の牙の幅ひ張くならばこれふまを
幸ひるる侍るば。他の中潔ふそ也るる。罪被ーも懇ふ。
まを留めーつふが失ちのひとれかるき濡衣の乾ようも
るりしふ。物ふ托ーく玉枕市前のあんいと惜ふるまべ。
助るる紀令下助けらまー。恩ふ報ふまこの時るり。今一篇つが
所天の面影ふまるる向ーけまど。懇ふるるるんば。忽強も
いとぐ情ふ新べ。おり（ゞさふの世ふ假の宿。永き冥土ー
嫡まの。契をたゞくのふると。言傳てゞといひろみて後いひ
殘と隠口のるるの紀別まとるひゆまが。れも涙ふるる紀

くまなくのがれんを思ふ。十分に謀らん為。仏辺をば村長辞呼よりせさせ。ひそかに竊に御花を招く。背門口より潜び入り。槐姫をば何とかく。納戸より生き出でて。姫の衣裳をお花に被せ。お花が衣を姫に被せ。姫君をば雀使の竹輿に投乗し。さてお花をば納戸なる。押入の戸棚に隠し。密やかに人をつけて。槐姫をば他所へ延し進ぜしが。陶五郎に呼まれて。とられ外面より走り出でて。納戸へ跳入り。外姪女お花が頸を刎て。隆春に遍くさらせ。めくらで恢うく謀りしが奸雄なる晴賢も。絶て友善と疑ひど。又仏辺同胞を追殺せどさるれば。幸にて槐姫の。お命無恙と妻女の功なり。仏辺その誠心を感ずるのあまり。且この如く園花夏山両比丘尼。

草庵なるに。槐姫の宣ふやう。彼女お花が首級を贈りて。有縁の道に心を葬らせ。又姫君のうへを委孫。事の経を告げ為。法會の施主に假托て。夜を日に続ぐ考まをして。仏辺に向ふのそなたに。愛惜の覊に牽れて。ちぶしその身に黄緑更に身の危難を救ふ烈女お花が孝後の貞操。面前にうたて感佩。嗚呼奇なるかな。奇なるかな。と兵晉に歎賞し。一五一十を説聞せば。奥に忽地ようと泣。女子の声ゝ抜萃微笑尼。姉のお通も悲るべし。それにてふ来ひねと。ふのうまを七日。義に義なるこゝにして。我に欲び我に哀を原来お花に槐姫の。命に代るふけりかな。てこそ七ぶ汚名を雪る貞操公烈。それとおもふ八千川ゝ。俤ひとへ世よる乳襁の。おとひ生て嬬夫の別を惜欲不役。天晴ゆ厚恩ぬ。仏辺のうへせば。姫君いそ悲るうんさるまでも。古人二郎左衛門友春ぬし。

未然を悲しむ古来の世の慣の習ひ。あらぬよあらぬ才浅けれどバ乱ひもうけビ。
此辺を姫の仇として。殺んとするまゝ七八。悔をうさ祈さう。祥一郎と額を著
涙をかゞやヒ北まうぐんでとゝくゞ今更よ生るがごゝ妻の首ふ。哀傷さゝとと
厚金八件の首級をとりあげて。花桶の内よあさあ天女を祀る法場ふ融
髏の汚穢いと恐。菴主の女婿よ附属して。法華延果て葬ゆ。といひつ遍
ぜバまゝ七八。花桶をあゆふ受。槐樹よ刎る合歓の花。ねぶりて学庵ニ妻の
夜墓八則ゆ向の花桶。鬱ふこゝ来ゆ。あつるとゝ。つまを濃一云塚の端ふも。
定めゝゝ八哀別離苦一夜ゝゝれて又あゝて。ゝゝれの後八いつゝゝんと云ゝて
げふ卿ゝ衆。女子の愚癡とのこゝひて。いひぶひみとて叱りを。ゝゝみとや
恨こけん。ゝゝバ不便の終焉ゝゝと又ゝゝかゝと苹環のいとゞ哀八いや
ゝゝ。嘆ゝらかゝて厚金も。頻よ嗟嘆ゝゝゝゝ。

柴櫛の雨笠

厚倉隼人が物語を。夢のごゝよ。安居たる全火八安ゝ覺て。
勃然と身を起ゝ。仇よ与せる四五六の隼人友善。妨せバ目よりの
ゝゝ七。半七ゝゝ共刃を受よと。罵をつ。縁頰へ跳上りゝ。刀の
鞘ゝを拭ゝ八。貴布の幕をさと揭ゝ。一人の武士ゝゝゝ。
全火を遮ゝ苗めゝ右まゝ引提ゝ小刀を抜も放さゞ礙と打バ。
全火瑞を搔廻ゝ。信とゝの顔をうち。覩ゝ去年の春。櫟本の
あゝゝまゞ跡跟ゝゝゝゝ。諦る。汝八赤根半之進。実父の仇人
脱さゞと跳蒐ゝ。腰刀を抜んとゝゝを抜ゝも果ゞ又ゝと打居
ゝ八全火ゝゝ焦燥ゝ。組んとゝるゝを楚と取ゝ。早りあゝ
半之進ゝ上べゝ窮事ゝ。今ゝの小刀をゝて打ゝゝゝ

私意ならぬ乃ち父順孫朝臣の後事を懲らしめ打撫でぞ
ぶひあつかうめんと仂るゆとのられて全く云ふを仂ども。その期よ
及て命を惜欲ぶ実父の今市全八養父の敗績及四郎。これより
外よ親いる。戯言食べと立あぐつて。勝負を決せんと敦圉ば。
半之進莞爾うち笑ふ君の為よ一点ぐつても命を惜ぬ半之進
何狼狽ちる仂をちんべん君い正しく続井の嫡男今市あんどを
実の父と思ふい物体ず。いざあること莽しく。上坐へ推居れば夏ま
倉車人も席をゆり。半七もそのるの頭末いちらねども父の後方小
居うりて各位ぶしく敬されい全く云ふ疑ひ惑ひてよを
又九つ沈吟せり。当下半之進い膝行しく席をとめ縁故を知る
ねい疑惑しめのい理とうり。傍よび三十ぬ一年よりやるり

べ。永正十二年といひ春の比。ぶ君順勝朝臣吉雄九たりし時
積鬱を保養の為。兼洛へ湯てしのぼりぬ。供よい今市全八。
布施蝶九郎。あ〜ちうん半之進ゆひ。ちるに仮臣布施今市ホ
君よ渇酒をきめ進らせ。兼洛よ名たり所白拍子歌舞姫を
集合つ。長夜の飲その度よ過たりされば石ぶ。菊姫の中小笠屋
小夏とのふりのあり。彼い兼洛の刀拭同樹といふあ女児あて実の
名をば増穂とぬり。貧屋夏よ歌舞を習ひて。むしの手よ微妙
ともいひつべれ弱女なれば吾君不覚よれちろを移られて有一夜
小夏ぶ九祇館へ止宿さ。ぶひつかさらひのよ小夏い元来吾
君ぶ続井の郎君とぬちらどぞ。その名を問ば吾君も実の名をば告
ぬ。ぶれい続井の近習の士今市全八郎といふりのと。詐欺て。

二夜さ勢りをかさねあかう。某よ密語あひしらべこい物体あれ
ば進止めるべしなるもいえひらべけり平城へ参えるべき大殿の怒り
はさうあん身のうへよいかんと面を犯しく諫めやうちうべ是うう
小夏をうれざれども君も兵某をいぶせしの小思召今市布施ホ
時を待て。遂を其の間なるし初よ某いかん前を遠離られ病と
稱しく中宿よ籠居しひとりを労ちが果しく君のかん越度
平城へ参えれ父子の間よりいぶ来あんとたくしうべ厚き君二郎大夫
られを勢れ竊よ某が旅宿を訪て計策を謀めしるの或某が
刃よ負て。その夜三勝を棄ひ去まし大殿のかん憤怨他解橋梓
和順なるあひ死あて六年の春秋しらて某夫婦呂うされ又いぐく
の年を孫れども吾君のかんまあ穂姫のあひて田力あい

絶てまゝ中さうべ。続井の血絡絶んうとて君も物憂あがり呂ども。
人力のなぶべらよあらじ。さる初よ一昨年の初冬六日。浪速なる千日
墓よて。某一家。蛾松一族。絶行の米を引たし小集合たる貧人
乞丐多なる中よ。年才さる廿八九なる壮佼のいと変しくえたるが。
人の後方よ立躍き。絶米を受て帰るをうれべ。その面影何と
る。吾君順勝朝たよう似うう。ろろ泊がくらひつ。ふく意小も
とめざし小去年の秋操本の松原よて某が轎よ鳥流をうち
かけられし時。親母の自殺よ愁傷ける壮佼あり某そのうた私述の
八幡宮ようう人さ。樹の蔭よ立躍きて。事の容を張へ。そきゞ
養母い某が母。篇篠が妹晩猶るり又壮佼い刀冶同樹が妻の孫
今市全八が実まるるう。未しくたり死口説を。ほくゞと安て

闕窺るに彼壯佼いぬる年千日墓に施米を受たる負人なり。
えれいえるまく吾君の面影よりく肖たり。折しもあれ暴小周防を
逐電せり。厚倉隼人いそ走りて。殿鐵の四五六と名告つ。彼壯佼を
勦に慰め早稲の死骸を鎧櫃に納めて立ゐる。彼隼人ぐみる件
実滝酒に気を忘れて。逐電さびたりのよあらぐたりるに彼人牙を
竇く。彼壯佼救助るの。呂の所ある小ふそと推量にその夜刀を
打折に某が預たる。主君恩賜の小刀を抜あい。彼壯佼が隅を
一大刀砍著あへるく曳に。私卒丹三が死骸のほうに送りたる。
件の小刀を取て。挑燈の火につくくとられをえれいえ。じめて君頓勝
朝臣米谷山の妖気をえんとて。樓に登りつ。この件佩刀を走ら
しる。隣口を突傷にあひたりの刀失に疑著し。主君の鮮血と

壯佼の鮮血とひとつに聚まりぬ。況諍に夜親子の證据されぐら
この件佩刀をいくもまさしく湯にて。丹三に件預しる下郎なれども
丹三が彼君に傷て。一命を隕せり。家に。丹三に件預しる下郎なれども
さるを。叔母早稲老女が。襁褓の中にて。君に件を挙あひつ。
生育せり。その功も又賞とべ。と思いとで喜くも。又哀しさも限に
なれど。厚倉隼人傅に居れい。郎君のうへ安し。とその夜そ
その夜追ひも留ぐ木精塚を発ぬ。君に禍あらせどとく。
隼人が所ゐるとい精しるぐらに。秘て人に告ぐ閉居恩免の
日を待て。この件佩刀に聚合たる。ほ文の鮮血を吾君に注せ
ぬり。ありつるのどもまさしたるに吾君に夫婦欣然と欲びたり。
つるに時の過失い老とに今の幸福とるりぬ。齢既て

五十人ばかりのから男児ども死をいとはずいさみ
ぶるを獲たりしが汝ホが丹誠よりれを早稲丹三が後の世を
叮嚀に吊ひなさをよ隼人がるが後日に賞せんたのびくふるの
往方を索ると仰つ。又このあん佩刀を預かされひたかして大内
家の擾乱によりて某くを間諜者を。多治比山口へ遣しは。陶と
大江の善悪虚実を窺せ。郎君に隼人とくも小永上のほとりに
在るうを傳聞。更に主君の仰を稟。大江家と謀り合せて晴賢を
討んと沼多の新関の間たる比某窃に当地に来たりて。昨今
拾義菴を旅宿とつ。而をの法会に假托。後夜とくに来ぬる軍兵を
この処へ集会たり。君に則晴賢征伐の大将軍全を改めてげの
らを続井小太郎順啓と稱しまるべ貴殿の嚴命に疑念を
解てあん佩刀を受収めぬへりとかちもの〻涼説に小刀を引抜て。
刀尖をうえせ進らせれば順啓に聚合たる。鮮血をうちうへ打へ。
とうえかうえつ鞘に納め。三扁戴たく腰に帯。大息吻て衣を更め。
面目のや赤根父子。誘ふの氏ようり育養毋早稲の物ぐりまく。
ようが実父に続井の退糧人今市全八郎といふりのこと。ようて却て
これまに忠義ふりた。手之進親ふを怒りんとせしを。勸解ふもあまり
あり。隼人にはうへたちざし欲たりたいのどてや告ざしと。向せなくぞ
厚倉隼人欣然とうくさを出れ不審にさるみのぐら某浪速よりし
とた。かすど敗鐵賣買たのの君に面影をうえなるよ。順勝朝臣に
似ぬつ。大殿のとうくをいたり時。義隆の歌妓姫ゆんどを召されて
しるに亡父二郎大夫が物語に。実たるゆえばり続井家の落胤

ゐいをいさどゑと呉いゆもゐ〜交てて。浪速よてゝ永樂銭
三貫文を猾りて危窮を救ひ。そのゝち櫟本の松原よて。自殺を
とゞめ。その又い続井の退糧人今市全八郎ゐるゝをゝちめて空ども
面影い。続井殿よ似ゆへい故ゝそゐらめ。と偽初よ復讐の助大力
ちゞ。勢ひい示〜ゐゞゝ。霸よ赤根が肴とゐゝ。周防まゝ伴ひ
ゆゐらゝ呉続井殿の落胤ゐゝ。證拠をえ出とりゆ。と年来意を
つけゝりふのひゐさねど半之進いちゝゆゝられをたれて。寔小燈臺
根尚とい。隼人がゐまてゆ。と同答ゝうゝい順啓いまゝ〜感公糾
ゐゝどゐゝるべ。前象ゐりげん。ゝれ近丁ろ。夢よゐゆゝ人ゝ来たゝ。
軍法剣法弓馬を習〜。読書よ嬉を教ゝよ。三四十夜よ及〜
ゝ年来い一文一字も。引ざしゝれゐれど。ゆはゞ〜て怨恨よ。文武の
道を諳ゞたりゆゝも不思議のゆゐゝどゆ。と宜い半之進。それ
ゝそれ祖父順昭公ゝゝ。當代よ至るまゝで。数十年信仰ゝゆ志貴の
昆沙門の擁護ゐゝ〜ゆべ〜。現鬱よ半之進を驚んと〜なまひたる
軍勇皆悉法よ稱へゝまゆと憑〜くゆと稱ゝゝちゞ儒ゝゝ。半七
扇をさと披たゝ。郎君ゝれゝ。とさ〜向ゝ順啓一目よゝゝぶゝて。
忠臣不事二君。貞女不見両夫と書たるゝれい齋王蠲ゞ諳て。
本是史記よ出たるを。劉向説苑ゐゐ。又ゝゝの語を載たゝ。と説
示〜ゐゐゞ。赤根厚倉感佩〜。ゝゝの語い常よ世人の口遊いゝゝ。
何人の語ゐゝ〜。出処を定うよゝゝ。ゝゝ稀ゐゝ。神明佛陀の守らを
ゆへい龍よ翼の名大将。合戦勝利疑ひゐゝ。
又ゝゝゆゝ。布施物よ托ゝ〜。櫓姫をゞ唐櫓の中よ儒〜ゝゝ。

伴ひまゐらせつゝ。ようよう紛れ出でまゐらせば。暑気よ
堪ぞ坐をべし。同胞対面すゆへとて遠く庭へ引き唐櫃の
蓋うち開けて。槐姫のあんをを掩ひ。母屋へ誘ひまれい順啓そ
席を譲りまゐらせ。感佞ひ〳〵。されども年もるらふ苔れどその母貴く
をいたんび妹ありとも妨よ苦し。さそも晴賢ぶ逆謀ふく。百折の
艱苦を孤ゆゆと痛〳〵ことゆへと感めゆへば槐姫涙を袖に
うけおさめ。くくるく兄公よ面を対さる身の幸ひ世よ憑しく
思ひ侍り。但哀きむべたい初花ぶらいよ代アそあゆれ横死ぶめん
らもるく。かゆの法会の折を引くく。女僧ともるりそ亡夫とるき
人くの菩提を吊ひるんらのゆ許さゆへう。とひわそけよ宜へぶ。
厚倉集人小膝をたゝめ。姫君ふく〳〵み黙れゆひそか花ぶ横死い

彼ぶ情愿義基朝臣いいゆる秋葉山の御所よおいく刀を肚へ突立
ゆひ。猛火の中へ花のらんとしゆひしを隆春窮よ助まゐらせ。公役の
郎党しく。片山里へ偽しまゐらせ療治をさ〳〵術を尽しつ既よ
廃人とるりゆへども。あん命恙ふく。遠うらどしく。れ夫婦の再会を
ふ進らせんと慰めまうせば槐姫原来ふぶ呼天いるわらの世り
らそ在しられられぞ偏よ陶五郎ぶ稀ふる誠ひのあん不喜しやと
らいども。学を合しつ。周防のあさを拝さゆへば厚倉集人い懐中
ふそ。隆春ぶ髪のもと短冊をとり出し。扇よ我と半之進ぶるとり
近くられを置ふ痛しい陶五郎。養父の逆ひを諫うゆ。さくみも
腹を切るべるしよ。義基朝臣を救ひ出しまらんゆよるも死ぶ。
三〻び諫めく聴ざれぶ。弥哭〻親よ従ふ本末なるの道ゆれぶ。

今更又是非に及ばず。君命とはいひながら反謀人を親とし、あふ
隆春ぶ一世の不幸。そもそもめくらも牙のある果は仔鋸末の拙小首を
梟られ。大和に在を親同胞へ恥を送んと朽をてさよ四辺せあて隆春ぶ
志を父母に告。あれ後に八一篇の回向を憑と髪の毛を押切て短
冊とかろ共に遍されし。この世るぶらの像見るりられたまくと
指示ぶ。半七進その短冊をまよろうて。
玉髪の乱まどもうみ。あづさ弓。そらでゃぶるのりの道しべ。隆春
と二さび三さび吟じつ。半七と面をあつてぶるまどもらぶ。ぶれも
苔を掃ぶ。ちねど。陶五郎のこ不幸まくく。反逆人のまとるうて。
らんも過世の業因ぶらめ。といひつ。涙も一滴。あるで恨こと半七も。
矛ぶ。ありひゆ。涙を林示めくざれば。順啓も槐姫もらんが為て

嘆息し。目をちびたれぬるまぶ。興よりれ半括兼微笑尼お通も
共に西びめくぶ。声あり立てうと泣ぶ。半七進えうて。郎君の
出陣に。不祥の哭声奇怪し。両女僧い何処に在る。お通ぶ共ぶ
齎ーたるあん被長を。順啓君に進らせよと呼たれぶ。半七
涙を禁め。括兼微笑ぶ二人ーて。扛いづる渲堰お通いあづて蓋
取て。武運を用く小桜威五枚鎧の星兜。現故郷の名ぶ負ふ。
大和錦の陣羽織。小篠小ま奴袴。大刀六具。三人まくま被まわら
すれば順啓弓矢執て床れに尻をうけあ。そのうち威有て猛らず。
赤根厚ま倉左右に侍立し。暗号の笛を吹たれ。興に集会し
条詣の構元い里人ぶうぶ。ぶる是続井の兵士ども。甲冑小ま
固め。散動しうて立り出。廣庭陝しと隊伍ぶり。当下厚ま倉ぶ

後者ホも外面より走り来つ。二ッの梶をうち披て鎧一宿する能ハず。
軍監左右よ押立る。旗よ書たる二天の名号。嚴嶋辯財天女。志貴
昆沙門天王と。高々と唱ふ。諸軍彙一拜する折から。校計ちがへて
ものやらど事の趣からもの。ゆゑ果たる刀治同樹ひとつ。ひとつ
慙愧し。貴ろのやうり這出はひと面るげよ頭を低七十餘歳の
ろふまでも。欲よ固め五體一心佛ともも法ともも辨さで造りし罪そ
悔しられ。今ちらでも忠臣孝子。義夫節婦。順孫の集て世ものも
稀なる。操説諦しめよ清談をゆたちるが身が疎しく。又鈍く
恥しく。後悔今更その詮なれど。貞婦を詐欺て賣らんと。
忠臣孝子を虚たる。悪報ハ今面りどの竹。鐵よはちぬあれん。
南無阿弥陀佛と唱つ。折たる竹槍掻取て。肚へつんたちそんと

たりしが。順啓ハ忙しく。彼禁めらと宣へども。半七ゆがて走りて。竹
槍よ撞乃とめ。五逆十悪の罪人ようとも。懺悔よるその罪滅と。假ものも
親と憑しー人の悪念を轉じて。善ゆよ帰さる王。飲しくてそ。と
いひつ槍の穂を奪て。背さるゆ投捨ものと順啓ハ半七と同樹を
近く招たて。ひれハ襁褓の中ゆて。孤とるのそるべそのの父
定ろるらざしよ。乳母しくまるハ。汝が妻の恩惠し。又ろが妹
撓姫。去年ようろゆ身を寄しも。汝が妻の恩惠ろり。汝が妻ハ
ろが外祖母し。汝肉縁ろうとハ。ものろが外祖父しハ。ものろ死とべん。
提婆が悪も釋迦の方便。汝が妻の舊菴ろて。汝忽ち道ひを
發さとられ。又汝が妻の德ろりられ。凱陣の時を待ぞ実母潭德
養母早稲祖母小田井義女が花孝子ろ平作ホがあよ永年の法会を

彼に。括義微笑の西比丘尼をば。必大和へ伴ひべし。汝い今ようやらの
草菴よ住ねしと。お花ホが菩提を祈五所八反の良田を寄附して
読経の料とるさせん。餘命をちづるよ送れりと。叮嚀よ諭しめば。
同樹い感涙滝の如く。順啓攪姫を伏拝そ。又羊七ホを拝そ
ゆり。當ヤ羊七い外母括義尼。才婦微笑ホよ。沼多の新関を超
難ようと日。関防牌面を恵ようとろとびを述顔のようよ変アそ
あへがそれとも。ようよ立別ようと。愚よそあげりんとよ。身の
嘴を賠詰る行よ。お通も八千川の危難を脱さてらへまたりし
ようを物ようれば夏山い平太郎を呼びよ。羊七ホよ遣しうどろよ。
時刻もようぬべし。羊之進天うち仰ようりのもようる申の時ゆい遠
ゆりじいゆる日多治比へ遣したる。仙野呂東二いのまぐゆらど大江

家の消息いようあるらんかりとようゆとのゆ言葉のまぐ訛らど。働と
走ようまる呂東二道作陣笠取よ跪けば。羊之進佳とうて行よび
たりと仙野呂東二大江家の吉凶いようみよと小膝をすめよ。問ぐ
呂東二揆の袖を引ゆいよ威儀を強ひされば某多治比へ却て
再三諜しあいされい大江太郎乙訛朝臣密よ晴賢誅伐の謀を
めぐらしめへどそ。その便宜を沼ざりしよ。時ごそ来つれ陶晴賢を
厳嶋へ詰るよ。風声をきしめれる。のられ大江続井の
軍船。不意よ起よ攻討い。晴賢を虜よ為べし。さられ久しく
而ふらねば。宮嶋の辺于浮とようよ。自在よ船を進めば。
願ゆの所い兵而のみ。終日而ふらば。乙訛が晴賢を。饗遊の
夫役と偽り。間道ようり厳嶋へ押よせゆへ。彼処よて射面。軍

配をいひめいさんと宣ひて返書ハこれとさ〜せぶ。半之進受取て頂戴ス
進らすれハ封皮推切て読ぐ〜ら。已就の謀畧その図ニ当れり刀治
同樹懺悔〜て善ひよ立ハれハ九ニの件ニよりとあるりの悪人ハ絶て
ゐ。只憎むべきのハ晴賢のみ。ちろれども両ふちざね容易陶を討ぐ
頼む所ハ天女擁護。拓兼微笑ハ読経〜て。辨財天女祈れり〜と
宜へハ厚倉集人さを出いのく〜の小野小町ハ歌を誦じて。両を獲
たり。今のか通も幼稚ふり。轂鳴の道ニよりて。秀歌をさ〜多〜と
ぶけば。両ちの歌を誦セ。辨財天女を祝ひめ〜とハ頂啓ふち
五頭集人ハくもりたり。天地を動かも。元来和歌の徳と学ぶ。
通ハふの旨ふろ〜ふく准備ちよと仰ぎれば。通ハ再三辞〜ちうセど。
槐姫傷ふり。伝ゆるゆる諭すめて。姫君の料おそ。厚倉が疑ふる。

五衣緋袴。を親ふれを賜ふ。ぶが通ハ推辞ニ言繋ゐ。退て衣裳を
更括兼微笑ふ。ふも小。庭ニ出て半酒ふる。曲演のふとりニ立そ。軍
兵ホふを引く。轉ゐニ運び経机料紙硯をふ〜そえて。准備
既ニ整ハぶいと晴ぐ〜ふえよふり。ゆ〜て括兼微笑尼ハ念珠を
押揉合掌〜。能女摠持大智恵聚大辨財天神體を曼荼羅図
沼夏郡宮嶋ニ宮柱太〜建て祝れゐハ市杵嶋姫の神徳神威
空ふらどハ今立地ニ両ふ〜て。続井大江の両戎兵ニ力を戮〜たびハと
か通ゐふ且く念じて厳嶋を遥拝〜。両女僧ハ恭〜く光明経の級を
解て三遍戴ク。廣宜流布乃至得聞是経当令是等悉得怪利
不可思議大智慧聚不可量福徳之教と読経の声の澄〜ふ。
いとも尊く〜ぶが通ハ小雲時うち奈じて墨揭ゐぐ〜筆を

南河後巳巻八
嚴頂大新太郎
平太郎
半之進
雷太郎
隼人
そせう
羊七
忠貴見龍沙門天
ねんげ
どうじ
小野のか廻
ねんねん
旱天よ
雨を
彼此
團圓を

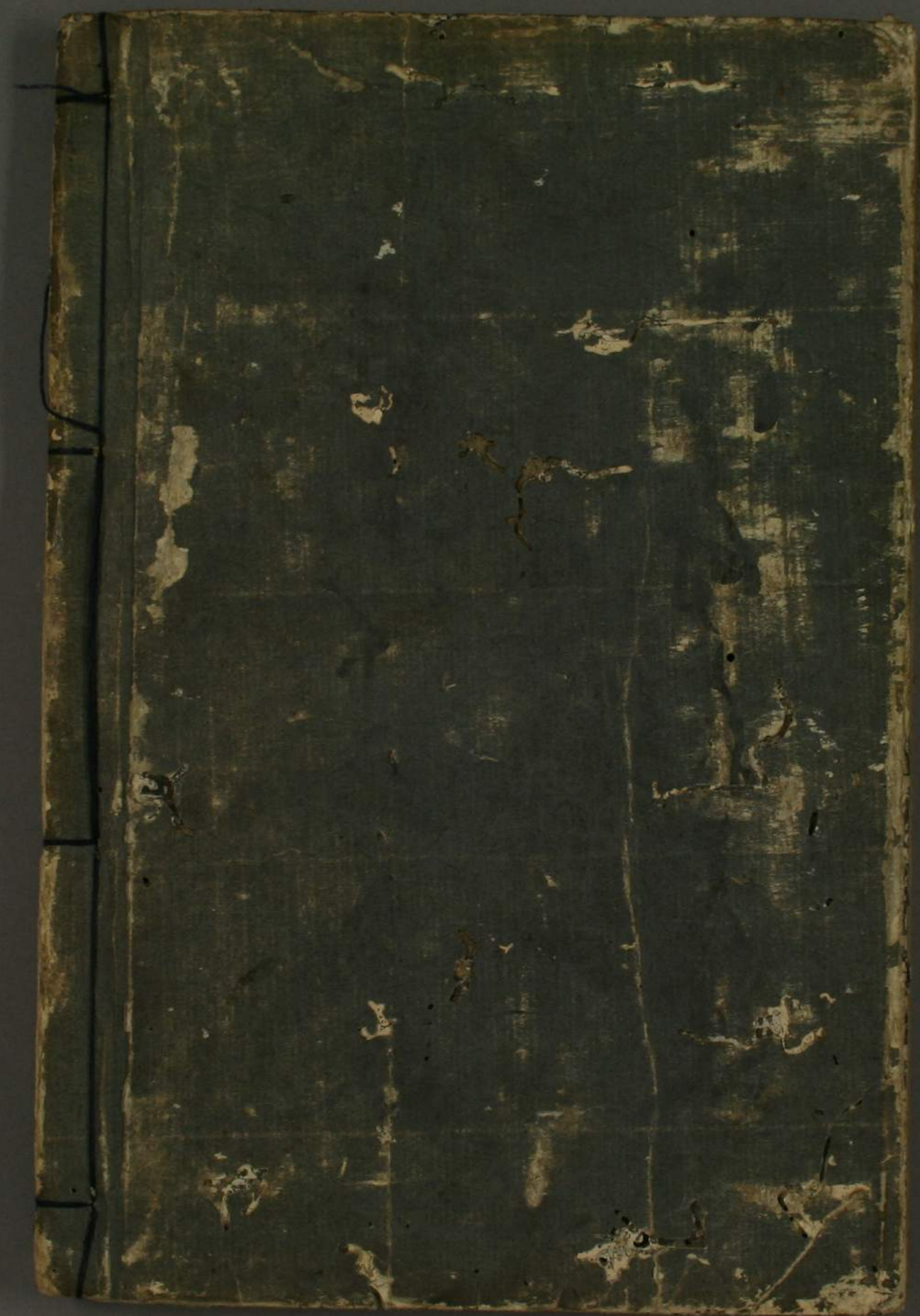
染て短冊に詠歌を書載し。筆を閣れ。

日を孫て民の草紙のあれやくよめぐるの雨をいそぐ。

かくの三遍吟じて目上に捧ぎ天女感歎へしたまひ庭の老水浪さわぐ。一天俄頃に結陰風颯とあつて彼短冊を空中へ捲のがすとぞ見えたりし。雷雨俄頃にふりそそぎ。草木も人も甦る順啓同胞赤根厚倉天に歓ひ地に喜ぶ。同樹をさらるり軍兵ぬ濡るゝも厭はず異口同音小ぢの感じ止ざりあり。ふるるに不思議るゝ。この雨括乗微笑の面を打て降流を祝に爛れる火傷の跡洗ふが如く愈消て。舊の如くよるりしぶ。両女僧の誠心を天女憐をめぐらせ一トしぶ傷たる容止のゝ愈たりとぞ。

冥助のまことゝ。衆皆信心膺に微して。未だのゝくあるひあり。順啓の殊更に感悦顔色に見れ括乗微笑が読経の奇特に能因が和歌に苏らどお通が詠歌に小野小町が請雨小異ありどめれに能因の二字をとりて。両女僧が名に被け。能括乗因微笑とぞこれを唱へん。まゝお通をば小町に擬して。小野小通と唱へべし。獲うた西を〻ぞ獲たれば時を移さず出陣せん義並の准備せよと宣に折ら人馬共に直と濡て。馳ふるのあり是則蛭松曽太郎なり。柴門に馬乗捨て衝と入て。順啓姫姫を〻〻〻〻〻〻〻〻郎君姫君へ〻〻〻〻〻〻〻〻告さても大殿いぬる寅の日夢の中に昆沙門天新向して告たまひしことあるをもて今日この処に郎君姫君の集合あり

ゝを知召れ。曽太郎を遣さるゝ所なり。郎君當家の大将軍ゝゝ。晴賢を警めゝゝ。重宦ゝゝ在らば敵ゝを偽らん欺。ゝを室町殿へ申ゝし請ゝ。大和殿よ任ぜらるゝ。姫君い括兼微笑お通ホをおろく。一圓平城へ帰誼あふ爲し。あん迎のね糸上ち。と演説ちれば順啓い謹ゝ父の命を兼且蛾松を学ひたまゝ。その隙よ赤根親ゝ厚倉い兼ゆゝり遣つ。先陣後陣と立るらべ微笑い涙さゝ。平太郎がまを。ゝゝ。羊七が側よ推ゆり。ゝりの祖ゝる忠義を竭さゝ。ひるゝゝゝり。又の代よ足よ繕ひよ行るゝも此平太郎を伴ゆへと。いひうけゝまゝうち泣ば。羊七有弼と平太郎を。遣の上よ楚と眉ひ親よ代ゝ天拘ち。ゝ弁笠松平作ば再びゝゝ存命ゝ。

忠義を演る四歳児の初陣伯父ゝゝ共ゝ分捕さゝられらのゝ念とせで故郷へ帰ゝゆひるば。家ゝる母とゝゝ在ん蛾松翁へお花ゝゆを言告たべとぞゝりよ。鎧の袖を密と濡せ。西いゝゝゝを。篠をゝゝ。降るゝゝ順啓麾を取ゝる。時刻移らべいひゝる。ゝ就よ先ゝられゝん。ゝ出陣と促ゝゆへ馬取の雑兵ゝ縁頻ちゆゝ牽居ゝ月毛の駒も西へ入る。佛の利益神の加護めゝゝ凱陣有ゝゝと送る姫君女僧お通い。修羅の巷をえ捨つ。大和へとゝく起程殘る同樹へ八重葉ゝゝ蒲の弓朱柄の槍の赤根厚倉勇ゝ。主を守護ゝゝ立出ゝを。

古夢南柯後記卷之八終